

---

# 怪力不死鳥少女は死者を蘇らせる！？

混沌の渦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怪力不死鳥少女は死者を蘇らせる！？

### 【Nコード】

N9122N

### 【作者名】

混沌の渦

### 【あらすじ】

死神に間違つて殺された人が能力をもらつて転生！なんか死者を生き返らせる刀をもらったけどそのせいで管理局に追われちゃいます。作者がまたまた勢いで書いた小説です。

## プロローグ(前書き)

またやっちゃた・・・。

## プロローグ

「私が他の人と間違えてあなたを鎌で斬ってしまい、あなたを死なせてしまいました！すいません！！」

ハ？

落ち着け私。記憶をたどってみよう。たしか、今日は同期の連中と宴会をして酔っぱらってたはずだ。それで・・・えーと、駄目だ。酔っていたせいかわからん。

「あ、あのー。」

ん？なんだ？その幼女？

「私の話、聞いていましたか？」

えーと、たしか間違って私を斬ってしまったとか。

「はいそうなんです。あなたとあなたのお友達は酔い潰れて帰る途中にトラックに轢かれて重傷を負って病院に運ばれてすぐに手術を受けて助かるはずだったんですけど、あなたのお友達のは助からずに死ぬ事になっていたんですけど、私が鎌を降る相手を間違えてしまったためにこんな事に・・・」

フーン、そうなんだー。

「い、いだだだ！あ、アイアンクローは痛いです！」

うるさい。こうでもしないと腹の虫が収まらない。

「こ、このままだとあなたを転生させられません！」

何！転生だと！ならばアイアンクロー解除（この間わずか0、2秒）

「あー痛かった。ではでは本題に入りましょう！」

うむ！自他ともに認めるオタクである私をファンタジーの世界に送ってくれるのだな！

「まず、チート能力ですが、それはこちらで決めさせてもらいます。

」

おい！それはないだろ！

「そういう決まりなんですよ。ちなみに能力はとてつもない怪力と、ONE PIECEに登場する白ひげ海賊団1番隊隊長マルコの能力に、影を操る能力です。」

うーん、強いのか弱いのか微妙な所だな。

「文句言わないでください。これが世界のバランスを保つうえでのギリギリのラインなんですよ。」

ま、とりあえず妥協するか。で？転生先は？

「それは秘密です。ただ、ヒントを与えるならあなたが知っているアニメの世界です。」

うーん、となるとどこだ？

「ではでは、行ってきてください。あ、あと、私からのせめてものお詫びとしてとても良い物をあげますから。」

て、お約束通りの落とし穴ー！！

第一話 とりあえず世界と時系列はわかった(前書き)

短いです。

## 第一話 とりあえず世界と時系列はわかった

私気がつくとき森の中だった。

「えーと、ここどこだ？」

とりあえずそばに池があったのでそれで自分を見る。そして絶句。

「ええええええー！！こ、この顔は！」

なんと私の容姿はFATEの桜のそれだった。そういえば胸も大きいような……。

「ん？刀に手紙？」

どれどれ

どうも死神です。とりあえず要点だけまとめますね。まずその世界はリリカルなのは世界です。時系列は第三期の開始二週間前です。そしてあなたの能力はお伝えした通りです。ちなみにかなづちではありません。影の能力は詳しくいえば影で攻撃したりとか影の中を移動できます。まあ、詳しい所は自分でどうにかしてください。あと、あなたは不老ですので殺されなにかぎり死にません。ちなみに容姿が桜のためいわゆる黒桜には感情が昂ぶっている時になりますその間は身体能力や飛行速度等が跳ね上がります。以上。

P・S 一緒にある刀は天生牙です。冥道残月破は危険すぎるので一日一回だけです。

「おい！さりと危険な代物をよこすなよ！」



おいおいこれってあの死者を生き返らせるあの！・・・わー迂闊に使えない。存在が知れたら管理局に追われるだろうな！。ていうか、

「ハー、どうしたものかなー。」

うーむ、とりあえず原作開始までに能力を把握しておくか。

## 第二話 とりあえず能力の実験

どうもみなさん、私です。あのあと手紙の裏に住所が書いてあったのでそこに行ってみたらなんと！私の家があったのです！中には家具などが整備されていました。とりあえずこれで当面の生活はどうにかなりそうです。

ちなみに私の名前は間桐桜ましくらばなになっていた。うん、手抜きだ。

「以上、状況説明完了。て、だれに言っているんだ私は。」

とりあえず疲れたので就寝。そして今に至る。

「とりあえず影の能力は昨日の段階である程度分かったね。まさか一瞬で移動できるとは・・・」

そうなのだ。試しに住所を思い浮かべながら能力を使いたいと思ってみたら体が影の中に沈んで、また出てきたと思っただけだったのだ。ちなみに私の影を操作して物を掴む事もできた。うん、便利だ。

「それにしても、このパワーはないでしょ・・・」

昨日はコップを結構な数割ってしまった。試してみたら冷蔵庫を指で持ち上げる事が出来た。わー、人と迂闊に握手できない。

「残るは不死鳥と天生牙だけ・・・」

まず天生牙を試すのは無理だ。冥道残月破は危険すぎるからね。死者を蘇らせる力も無理だ。でもって、不死鳥の方はというと、

「気持ちいいー！ー！！」

現在進行形で楽しんでる。いやー爽快だよ。でも、

「なんか後ろにいるよー。てか、あれってなのはちゃんたちだよ。」

そうなのだ。現在私の後ろには三人娘がいるのだ。うーん、目立ちすぎた。

「そこの鳥！止まりなさい！でないと攻撃します！」

うーん、どうしよう。影の能力使って逃げてもいいんだけどこっちの情報はあまり渡したくないからなー。……よし！このまま振り切ろう！加速！

「はあ、止まらないんなら、力づくで止まってもらいます！ディバインバスターー！！」

て、攻撃してきたー！まあ、別に平気なんだけどね。

「っなに？あの青い炎？」

「傷が治っている！？」

「んなアホな！」

おーおー、驚いてるねー。さーて、このまま上昇！

「あー！待ちなさいー！」

「く、これ以上は無理！」

よしどうにか振り切った。さーて、とりあえずこっそりと人目のつかない所に降りて、能力使って帰るとしよう。

一時間後

「ここまで飛べば大丈夫だろうね。やれや！」

突然私の足元に刺さるおもちゃみたいなナイフ。これって、まさか……

「動くな。お前は何者だ。」

でたー。銀髪眼帯幼女チンク。うーん、ちっちゃい。

シュン！

「ひー！」

「今なにか不愉快な事を考えなかったか？」

わー、背後に般若が見えるよ。気にしてるんだ。やっぱり。

「えーと、わ、私は間桐桜といいます。散歩してたらこんな所にまで来ちゃって。」

「嘘を言つな。それに、嘘ならもつとましな嘘を付け。」

「やっぱそうなるよねー。でも、時間を稼げば十分。」

「それー！」

「！ー！」

「実は影をこつそり伸ばしてナイフもどきを掴ませていたのだ。そして、それを投げたのだ。さらにこの隙に！」

「それでは私はこれにて。」

「っ！待て！」

「影を使って家に移動！」

「いやー、いくらそんなに簡単に死なないとはいえ、びっくりしたー。今日はもう寝よう。」

第三話 使っちゃた・・・(前書き)

今回アレを使います。

### 第三話 使っちゃた・・・

帰宅後、夕食を食べて（外見が桜のそのせいか、転生前はダメダメだった料理ができるようになっていた。ラッキー）TV<sup>ドラマ</sup>を見ながらくつろいでいると玄関のチャイムが鳴った。

（こんな時間に誰だろ？というか、私を訪ねてくる人なんていないはずだけど・・・）

疑問を浮かべながらもドアを開ける。

「はい、どなた・・・」

カチャ ドアを開ける音 バタン ドアを閉める音 ドン 閉じるのを遮る音

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そしてトーレとにらみ合う。

（なんで！？なんでナンバーズが私の家に！？）

そうなのだ。ドアの向こうにはナンバーズのトーレとチンクがいる。一体何故住所を？

「顔と名前が割れているんだ。探すのは簡単だ。あと、声に出てるぞ。」

そうだったー！！名前教えたんだー！！だから分かったのか  
！！というか、声に出てたんだ。

「とりあえず中に入れてくれ。こちらに争う気はない。」

「………わかりました。どうぞお入りください。」

このままの状態を誰かに見られたら通報されかねない。しびしび  
中に入れる。

「……本来ならお茶の一つでも出す所でしょうけど、さすがにそ  
れは無理でしょうね。」

「察していただいてありがとうございます。では、単刀直入に聞こう。あの力  
はなんだ？」

やっぱりそれを聞くか。ま、当然だけど。しかたない。変になに  
か言ってマジバトルになるのはごめんだ。正直に言おう。正直が一  
番だ。

「……簡単に言えば影を操る力ですね。」

「影を？」

「操る？」

直接見せた方が早いでしょうね。

「ええそうです。お見せしましょう。」



そう言って影を伸ばして近くにあった椅子を持ちあげて見せる。

「「!」!」

「あの時はこの力を使ってこの家の中の影と私の影をつなげて逃げたのです。」

「・・・なるほど。便利な力だな。」

「それで？要件はこれだけですか？」

絶対にそれはない。彼女らにしてみたら自分達の事を管理局にでも通報されたらたまったものじゃない。となると、私を殺すか、それとも・・・

「うむ。実を言うと我々に協力してほしい。あなたの力はなにかと我々の計画に役立つ。」

ほらやっぱり。そうくると思った。

(協力するのはいいけど色々と実験材料にされそうだなー。かと言って断ったらバトルになるだろうしなー。どうしよう。)

「考える時間をいただけないでしょうか？」

「そうしたいのは山々だが、そういうわけにもいかないのだ。」

「ですよー。うーん、どうしよう。・・・よし!決めた!

「・・・わかりました。協力しましょう。ただし条件付きで。」

「条件の内容によるな。」

「簡単です。まず、私の体について詮索しない。次に私の役割はできるだけ逃走ルートの確保に専念させ、戦闘には極力参加させない。以上です。」

「・・・いいだろう。それぐらいならなんとかなるだろう。では、これからよろしく頼む。」

「ええ、こちらこそ。」

「では早速で悪いが、これから我々はある男を殺しに行く。一緒に来てくれ。」

「早いですねー。早速ですか。やれやれ。」

「その男の人はなにを？」

「我々に情報を提供している管理局の者なのだが、どうも私達の体に関する技術の一部だが盗み出したようだ。」

「フーン、よく盗みだせたなー。」

「つまり機密保持のため？」

「そういう事だ。それと、お前を現場慣れさせるためだ。」

なるほど。早い話、死体を見るのを慣れておけということか。そ

れにしても、

「さつきからうまい具合に話が進んでいますけど、もしかして私が協力する事前提で動いていたんですか？」

「ああ、直接尋ねて時間がないと言えばそうなるだろうと踏んでな。まったく、さつきはああ言ったが、実際は住所調べるの大変だったんだぞ？名前が珍しかったからよかったようなものだ。」

「アハハ、それは御苦労さま。」

たしかにミッドの人口を考えると大変なのは容易に想像ができる。まあ日本名なんてミッドには普通いらないからな。だから見つけたんだろうな。

「おい、お前ら、下らん話をしてないでさっさと行くぞ。」

「ハイハイ、今行きます。」

やれやれ、眠いけど我慢するか。

三十分後

現在私達はお約束通りに薄気味悪い路地裏にいる。そして、私達の視線の先にはこれまたベタな黒いコートを羽織った男がいる。(私達はこれまたベタな少し離れた所にある木箱の影にいる。)

「あの男ですか。」

「ああそうだ。どうやら盗んだ技術を他の組織に売り飛ばすつもりだそうだ。」

「へー、用は金のためですか。」

どこにでもそういうバカっているものなんですね。

「そうだ。・・・そう言えばお前の持っている刀、なんなんだ？それ。」

「これですか？これは天生牙といいまして、存在が知れたらロストロギアに指定される代物です。」

そう、実は天生牙を持ってきている。もちろん試すためだ。

「・・・何故そんなの持っているのかは聞かないでおこう。そんな事より、さっさと片付けるぞ。」

あ、信じてませんね。ま、普通はそうでしょうけど。

「私がやる。『IS ライドインパルス』」

ヒュン ドシユ

お、速攻で胸を貫いて片づけた。さすがナンバーズ最速。さて、私もやりますか。天生牙を抜く。

「ん？どうした今更抜いたりして？」

「・・・・・・・・」

見えた。あの世の使い。では、切り捨ててご免。

ヒュン ザシュ ヒュン ザシュ

「？おい、どこを切っただい……」

「う、う、う。」

よし、成功だ。生き返った。

「バカな！？確かに殺したはずだぞ！？」

「ええそうですね。だから私が生き返らせたんですよ。」

「まさか、その刀の力か！？」

やっぱり信じていなかったんだ。

「その通りです。というか、さっさと殺し直さないと逃げちゃいますよ？」

「ハ！そうだった！デヤ！」

「グッ！」

あーあ、どこかの誰かさん。二度も殺されるなんて不憫ですねー。ま、汚い事をやっているからですよー。人の事言えない。

「さっき言っていた事は本当だったのか・・・」

「ええ、ちなみに使えるのは一人につき一回だけ。つまり二度目の生は一度きりです。」

「そ、そうか。覚えておこう。では、今日はもう帰れ。またなにかあったら連絡する。」

「そうですか。ではさようなら。」

フー、やっと寝られる。正直、眠くて眠くてしょうがなかったよ。だって今午前1時だもん。

## 第四話 顔合わせ

翌日、眼が覚めた私の枕元に何故か手紙が置いてあった。どうやらスカリエツティからのようだ。何故置いてあるのかは考えないようにしてとりあえず読んでみた。そして、内容を要約すると・・・

どうも、私の名前はジェイル・スカリエツティ。トーレ達の生みの親だ。さて、このたびは我々に協力してもらい感謝する。つきましては、今後の為に色々と話をしたい。同封の地図の場所に来てほしい。 追伸 この手紙は燃やしてください。

となる。本当は私の能力やら天生牙の事やらを調べたいという事がたっぷり書かれていたが、もちろん答えはNOだ。モルモットになるつもりはない。

「えーと、地図の場所は・・・げ、ミッドの反対側じゃん。はー、面倒だなー。」

と言いながらもしっかりと準備をしている私であった。

「さーて、町に人が出てくる前に行くとしますか。」

私が起きたのは朝の5時。転生前からの習慣のせいだ。おかげで寝不足だ。だが、おかげで人があまりいない。その間に出来るだけ進んでおこう。

一時間後

「フー、やっとついた。やっぱり遠いなー。」

え？なんで影で移動しなかったかって？実は場所が廃棄区画であつたため、瓦礫等の真下に移動する可能性があつたのだ。しかも、どうやら地上本部が時々訓練に使っている場所のため、局員と鉢合わせする可能性もあつたため徒歩で移動するはめになつたのだ。

「お前がスカリエツティが言っていた者が。」

「！！」

び、びつくりしたー！！いきなり後ろから声をかけられた。振り返ってみるとゼストがいた。後ろにルーテシアもいる。そして、ゼストの肩には・・・

「よ、妖精！？」

「誰が妖精だ！！！」

とりあえずお約束の反応をとっておく。しかし、やっぱりアギト小さいなー。間近で見るとなお小さい。

「今なにか失礼な事考えなかつたか？」

「いえいえ考えてません。」

わー、やっぱりそういう事には敏感なんだなー。にしても、何故



か私の足元がやけに明るいやつな・・・って！いつの間にか転移の魔法陣が！！

「ちょ！いきなりすぎん」

私のセリフは最後まで言えなかった。あとで聞いた話だとその時ルーテシアは寝起きだったそう。ようするに寝ぼけてたそう。やれやれ。

「そして今に至る。」

「誰に言っているんだ？」

現在、アジトの中。私を案内しているのはチンクだ。うーん、昨日は状況が状況だったのでよく見ていなかったが、可愛いな！。

「？なにをジロジロ見ているんだ？」

「いやー、チンクって可愛いって思ってー。」

「か、かわ！？／／／」

見事に燃えてるかのごとく赤くなった。

「え、ええい！つ、次に行くぞ！」

「ハイハイ。」

そうしてオットー達が眠っている場所やガジェットの格納庫なんかを見せてもらい、現在スカリエッティの研究室だ。

「やあ、よく来てくれたね。はじめまして。ジェイル・スカリエツ  
ティだ。よろしくたのむよ。」

でした。変態ドクター。とりあえず、愛想良くいこう。

「こちらこそよろしくおねがいます。間桐桜です。」

「うむ。では、早速だが君の能力について教えてもらいたいのだが、  
いいかね？」

「うーん、そうですねー。」

なにも教えないのは今後を考えるとよろしくない。となると、全  
てとはいかないがある程度教えるしかないがー。

「では、まず初めに影の能力ですが、これはもうある程度聞いてい  
るでしょうね。影をつなげての移動や影で物に触れる。これはもち  
ろん攻撃にも使えます。それからもうひとつ。影の中にある程度物  
をしまっておけます。」

「?どういう事かね？」

「こづいご事です。」

天生牙を影の中から取り出す。

「「「!?!?!」「」」

さすがに驚いているようだ。

「いやはや、便利な能力だね。ちなみに、中に生き物を入れておく事は出来るかね？」

「それはまだ試してません。多分できるでしょうけど。」

「そうか。それは後々確かめよう。では、今日はもう帰っていいよ。」

「あ、いえ。まだ見せていない能力があるんですよ。」

「なんと！この上まだあるというのか！それは興味深い。」

「では、見せるので少し離れていてください。」

もちろん、アレを見せるためだ。そして変身する。

「その姿、昨日報道された鳥ではないか！うーむ、ぜひとも研究したい。」

「それは勘弁ですね。というか、私もう帰っていいですか？それにどうせさっさとこっさり記録していたデータを調べたいでしょうし、もう帰りますね。」

「ハハハ、ばれていたか。」

「もちろんですよ。では、これにて。」

そして影にもぐり帰宅。さーて、今日のお昼は何にするかなー！。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9122n/>

---

怪力不死鳥少女は死者を蘇らせる！？

2010年10月28日06時46分発行